



スマホ1台で避難バスの動態管理を実現 多地点でのリアルタイム情報共有に貢献

北海道庁では、原子力災害を想定した防災訓練において、**住民避難用バスの動態管理と多地点間の情報共有**にBuddycomを活用しました。バス車両の位置把握、運転手への即時の情報伝達、各災害対策本部間での情報共有を担う通信手段として運用しています。

原子力災害時には、住民避難用バスの運転手へどのように情報を共有するか、バスの運行状況をどう把握するかが課題でした。従来はIP無線をバスに1台ずつ配備していましたが、専用端末が必要で調達に時間がかかり、災害時に迅速に手配することが難しい状況でした。

避難状況をリアルタイムに確認し、運転手への即時伝達や各対策本部の多地点間で情報共有を行うため、スマホIP無線サービスのBuddycomを活用。**スマートフォンが1台あれば使い始められ、災害時にもすぐ用意できる点**が決め手となりました。

原子力災害は目に見えない放射線による影響があるため、住民はもとより支援する関係者にとっても、なにより情報共有が重要となります。**話した内容と位置情報がログに残るため、聞き逃しても後から確認でき、その後の災害検証にも役立つ点**も評価されています。



北海道原子力防災訓練で初めて活用 多地点でバスの位置と情報をリアルタイム共有

主な使用機能



19台の避難バスの位置を 多地点で同時に把握

昭和63年から続く北海道原子力防災訓練で、今回初めてBuddycomが活用。避難バス19台に道職員等が乗車し、GPS機能・動態管理・グループ通話で北海道庁や各対策本部の多地点から車両位置を把握。渋滞情報を運転手へ随時伝達でき、各役場や避難先施設でもマップ上でバスの到着時間を確認できました。

音声・テキスト・画像の共有で、 確実な情報連携

話した内容は音声と文字の両方で残るため、聞き逃しても後から確認できます。道路渋滞や通行止めの画像をグループへ一斉共有できた点も効果的でした。運転手からは「話した内容と居場所を北海道庁で管理してもらえて安心感があった」との声もあり、会話や位置情報のログはその後の災害検証にも活用できます。



導入前の課題

- 原子力災害時に、避難バスの運転手への情報共有や運行状況の把握が難しかった
- 従来のIP無線は専用端末が必要で、調達に時間がかかり災害時の迅速な手配が困難だった
- 多地点間でのリアルタイムな情報伝達・情報共有の手段が求められていた

ご担当者からのメッセージ



Buddycomの活用により、随時、避難の状況を伝えることができ、関係機関と情報共有が図れました。関係機関等へのアンケートでは、自分の町のみならず他の町村の動きも把握できたのでよかったとの声もいただいています。